中京圏における航空機産業

実　本　八　重

わが国の航空機産業の売上高は1985年で6425億円（試作機も含む）で，それは世界的にも，また国内の他産業と比較した場合にも小さい。

しかしこのような航空機産業は，日本の産業経済発達史のうえでは重要な役割を果たしてきた。

わが国で航空機産業の振興がはかられたのは第1次世界大戦中のことである。その当時は軽工業が中心でまだ本格的な機械工業の基盤は未成立であった。戦争の主力が艦艇から飛行機へ移行するなか，海・陸両軍は航空機増産のため民間会社の育成に力を注いだ。その主力となった三菱・川崎は両社共，官営造船所の払い下げ等を通して，国策的に育成されてきた造船業の中心企業で，第1次大戦中に利潤を蓄積しその後の不況期にその資本でもって航空機分野に参入した。また中島飛行機は，航空機生産・試作に従事していた海軍大尉の中島知久兵が独立して設立したものだ。

これらの航空機生産のメッカは愛知・岐阜を中心とする中京圏で，そこには陸軍工廠の進出を契機に三菱，川崎，愛知，中島などが終戦までに集積した。この集積の背景には，中京圏が地理的に兵站基地的性格を備えていたこと，また新興都市名古屋が時の産業の航空機産業を受用するだけの用地，成長可能性が大きな機械下請工場，時計産業を中心とする地場産業の基盤等を持っていたことが考えられる。この機体メーカーの進出によって，周辺に下請工場も生まれ，また先行の各工場は軍需工業用に転換されていった。

戦後のこの産業の再構築は米軍によって朝鮮動乱を契機に進められた。この過程で，戦中資金援助を大きく国家に依存しなかった川崎・三菱が，それぞれ主力工場があった各務原・名古屋に組立工場を復活させ，中京圏は再度航空機産業のメッカとなっていった。この復興過程で，戦中にたくわえた技術をもとに戦後自動車産業の下請けに転じた各社は，機体組立工場を中心とする航空機の加工外注を請け合うようになっていった。そして高度な技術と精度を必要とする航空機部品を手がけることによって，他部門からの受注も生じ，現在では機体メーカーである親企業への依存率も低下し自立していく工場もたくさん見られる。このように戦中・戦後を通じて機体メーカーを頂点とする航空機産業によって，その底辺基盤となる地域の機械工業が育成されていった。

また航空機の研究開発上生まれた種々の新技術は，様々な生活分野で応用されている。

航空機産業はこのように他部門への技術波及効果が高く，また国際貿易上一国の貿易収支に与える影響は大きく，その育成はわが国にとってなおざりにできない問題である。また首都圏一極集中是正問題がクローズアップされる中であらたに中京圏が見直され，しかもそのリーディングインダストリーとして航空機産業が最適であることが行政的にも方向づけられ，それに備えての中京圏の一層の整備が望まれるのが今日この頃である。その整備内容としては，航空機の増産に対応していけるだけの下請工場の育成，国際・国内生産分担をスムーズに行うための空港・港湾・道路をはじめとする交通基盤の充実等が挙げられる。

鯖江市の眼鏡枠産業

下　川　和　美

福井県は眼鏡類合計において出荷金額で全国の40％，事業所数では58％を占める。その内眼鏡枠については，出荷金額でも全国の77％を占める。福井県のほぼ中央に位置する鯖江市がその福井県生産の75％以上を占めている。すなわち福井産地＝鯖江市といえる。

本論文は，鯖江市の眼鏡枠産業の内部構造と近年のその変化を考察するとともに，市内の他の主産業として繊維業・農業をあげ，それらとの関連を例示することにより，地域との結びつきについて考察することを目的とした。

眼鏡枠製造業者はフレーム（完成品製造）メーカー，部品メーカー，中間加工メーカーに分けられる。フレームメーカーを中心に部品メーカーや中間加工メーカーへ，或いは他のフレームメーカーへ外注される分業体制をとるが，一つの企業は数多くの外注先を有し，相互に複雑な関係を持って産業地域集団を形成している。

これらメーカーの他，卸業，材料販売業を加えた眼鏡枠産業は大部分が5 人未満の零細小規模である。中でも中間加工メーカー，特に組立やロー付工程のメーカーが零細で家内工業的である。

産地の構造の変化は，大手フレームメーカーのグループ化強化，レンズメーカーなどのナショナルメーカーの進出等によって，近年進みつつある。最も影響をうけるのが中間加工メーカーの中でも小規模なものである。

大手フレームメーカーのグループ化強化の動きには内製化や卸部門への進出がある。内製化のきっかけはチタンフレームの商品化であったが，納期，品質，デザインの漏洩防止の面からも内製化が進められることとなった。内製化の動きに伴い，外注先は数がしぼられ，その関係を密にしようとする傾向が生じている。

また中央のレンズメーカー等は，企画・デザイン・販売・在庫などの商社的役割を果たし，産地の大手フレームメーカーに全面的に生産委託をしているが，品質管理は念入りで委託メーカーからの外注先も指定される。これらの進出が進み，委託メーカーにおける生産比率が高まるにつれ，産地内の構造にも変化をおよぼすであろう。

鯖江市において眼鏡枠産業は明治38年に農村の副業として導入された。それ以前から地場産業として繊維業・漆器業がある。この内，繊維業は現在眼鏡枠産業とともに市の製造出荷額等の約３割を占める。しかし，かつては約７割をも占めており，その地位は眼鏡枠産業とは対照的に低下してきている。それに伴い，繊維産業従事者から眼鏡枠産業への転向も見られる。工場への勤務の他，自営としては技術を要さない部品メーカー等の創業が多いと考えられる。これらは，鯖江市内でも眼鏡枠産業の中心地をなす北東部においては特に多いのではないか。農業との兼業については，北東部の場合，次第に眼鏡枠製造のウエイトが重くなって農業の規模縮小を図り，現在兼業している農家は小規模な経営である。工場勤務の場合はその工場の規模は農家の規模とは対照的となる。

この様な地域との結びつきは鯖江市内でも集積度の高い地域ほど強い。

鯖江市における眼鏡枠産業の重要性は，今後も高まっていくであろうが，一方で眼鏡枠産地としての鯖江市の地位は下がる傾向にある。福井産地の中においても，規模拡大，内製化を図る大手メーカーを中心に鯖江市の近隣地域へ拡がっており，今後更にその傾向は強まるのではないだろうか。また円高基調の中でアジアNIESの部分品輸入や現地生産などの海外との分業体制も進むであろう。

砺波市におけるチューリップ球根栽培の地理学的考察

島　晴　己　子

近年わが国における花卉の需要は著しく増加しており，私達の周囲にも多くの切花，球根類がみられるようになった。庄川扇状地の扇央部に位置する富山県砺波市庄下地区は，昔からチューリップ球根栽培のさかんな地域で，現在でも県内のチューリップ球根栽培の中心であり，日本における輸出用球根の大部分を生産している。この地は，富山県内の他の平野と同様に，水稲単作地帯といえるが，チューリップ球根はその中でも異色ものとして注目される。従って，特殊な集落形態をもつ砺波市の農業及びチューリップ球根栽培の最近の動向を調べるとともに，農業集落の景観，社会的変化や他産地との比較により，その成立要因を考察する。また，農家の実情をうかがうこと